# 超高齢社会の先を見据えて

柳　修平（東京女子医科大学大学院　看護学研究科）

10 年後にベビーブーム期の「団塊の世代」が後期高齢者に至ることが「2025 年問題」として公衆衛生および社会保障の課題に問われている。世界に例のないハイレベルの健康水準と健康生活を支える社会環境を築いたわが国では、高度経済成長ポスト期においても個別・並列に起こる健康問題には「憲法 25 条」を護ることを国の責務とし国民の公衆衛生の向上に努めてきた。「人生 80 年」を目標に据えた国民健康づくり運動、医療保健福祉計画への統合化、国民医療費負担の適正化を意図した社会保険制度の改正や新設等、高齢社会を予測した様々な施策を経て、現在の高齢社会大綱では「人生 90 年時代」を掲げている。かつての老年人口を指標とした課題は実質的な意味が消失し、先を見据える社会が広がっているかのように進んでいる。

しかしながら「豊かな社会」の背景で拡延した生活観・価値観の多様化は、もはや個性や世代という枠組では捉えきれない現状を醸し出していながらも、少子高齢社会対策の包括的枠組で個別性を意識した対応ができる専門職を求めている。医療・看護専門職の根本にある役割は、人々が幸せな生活を自律的に送れるように援助することにあり、それらのサービスの担い手をも包含した生活者の視点が見据える専門職が再び注目される。

言うまでもなく健康は生を支える条件であり、人の生は生活文化と大きくかかわるものである。健康生活上の問題解決を未然に計り、鋭く注視できる専門性により健康生活を確保することは実践科学として期待される看護学の根源的課題である。俯瞰して全体を見ることと詳細に部分を見ることがルーチンに実行できる看護実践力を生かし、人々の生活に生起する現象を印象として捉えるさらにその先に、人々の多様な認識と行動を考慮した確実な検証を知悉する看護学をさらに発展させ繋いでいく挑戦を大いに期待したい。